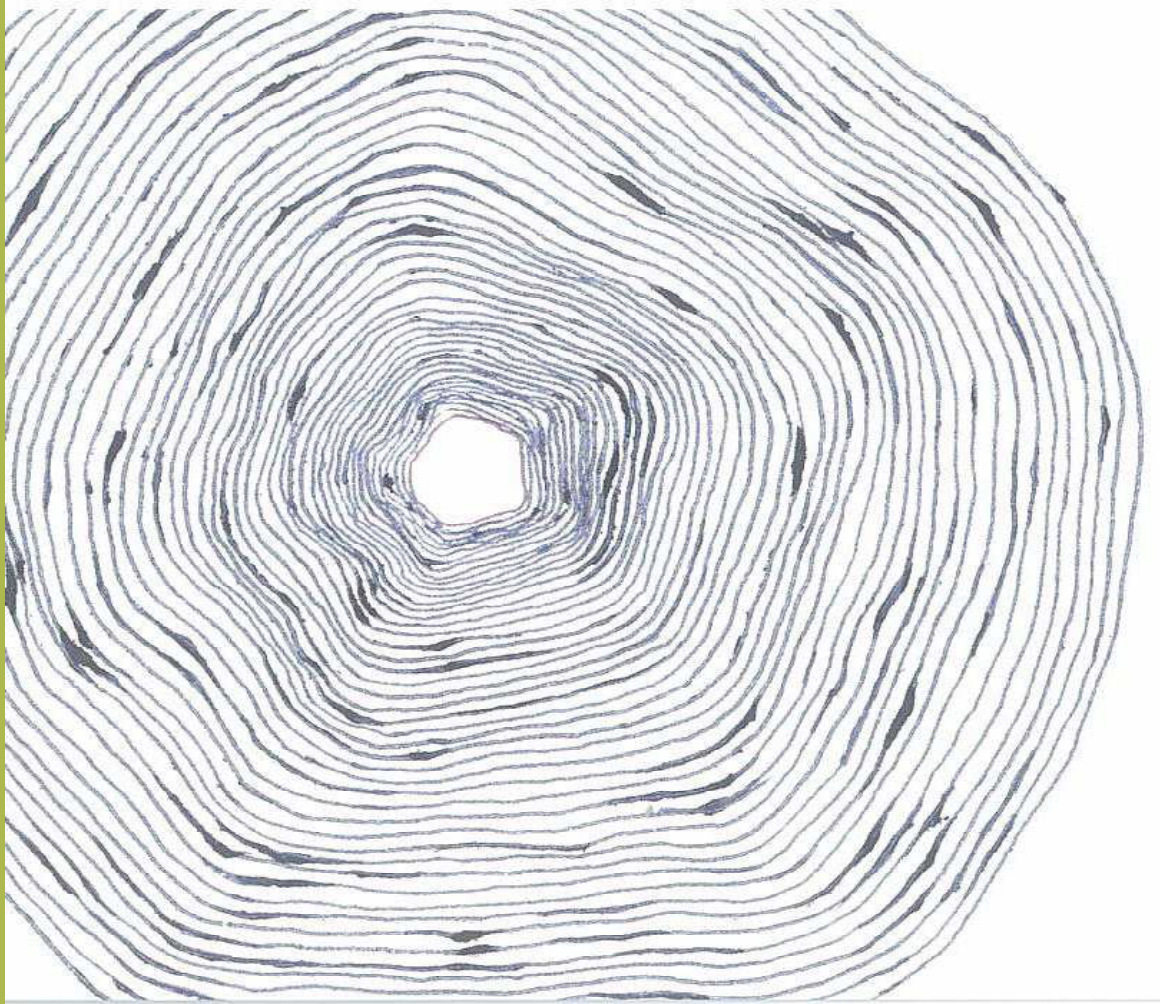


Annual Report 2006

Annual Report 2006



SUEMOTO, TAMOTSU

Action Research Center for Human and Community Development
Graduate School of Cultural Studies and Human Development, Kobe University

神戸大学人間発達環境学研究科
ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

ANNUAL REPORT 2006年度

contents

目次	
Director's Review	
センター長挨拶	03
Action Research	
2006年度実践的研究の内容	04
Co-workers	
運営協力者・共同研究者	12
Topics	
2006年度プロジェクト	13
Outline	
センター概要	16

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター 2006年度 スタッフ一覧

センター長

青木 務 (発達科学部長・兼任)

子ども・家庭支援部門

伊藤 篤 (専任研究員・教授)

障害共生支援部門

津田 英二 (専任研究員・准教授)

ジェンダー研究・学習支援部門

朴木 佳緒留 (専任研究員・教授)

ヘルスプロモーション部門

川畑 徹朗 (専任研究員・教授)

ボランティア社会・学習支援部門

松岡 広路 (専任研究員・准教授)

労働・成人教育支援部門

末本 誠 (専任研究員・教授)

プロジェクト研究部門

■出版プロジェクト リーダー

太田 和宏 (発達科学部 社会環境論)

平山 洋介 (発達科学部 生活環境論)

■市民科学に対する大学の支援に関する実践的研究 リーダー

伊藤 真之 (発達科学部 環境基礎論)

事務局

■ヒューマン・コミュニティ創成研究センター 専従事務スタッフ

濱岡 理絵

■のびやかスペースあーち 専従事務スタッフ

尾堂 裕子

Director's Review

センター長挨拶

再出発に向けて

ヒューマン・コミュニティ創成研究センターは、2005年4月1日に総合人間科学研究科の附属施設として発足しましたが、教育・研究の基礎となる発達科学部が2007年4月1日に大学院化されるに伴い、人間発達環境学研究科の附属施設として再出発することになります。新研究科の附属施設としては、はじめてのアニュアル・レポートで、内容的には基幹部門研究員の研究業績などを加えて刊行する運びとなりました。

当センターは、大学が地域や学校、行政、企業等と協働し、人間らしさあふれるコミュニティの創成を目指した、さまざまな実践的研究を行うことを目的としています。発達科学部とその大学院である人間発達環境学研究科では、従前より、人間の発達と発達を支える環境について教育、研究してきましたが、その全体を覆うキーワードがヒューマン・コミュニティ創成研究でありました。このようなキーワードを冠したセンターを創設したことは、学部や研究科の特色を明示するという意味もありますが、それだけではなく、今日の時代的、社会的要請に積極的に応えたいという私たちの思いをかたちに表したということでもあります。

科学技術の発展や地球規模でのグローバル化は私たちの生活を大きく変化させ、暮らしの利便性、快適性を増しました。ところがその他方では、改めて、人間らしい生活や環境とは何か、人間らしい発達とはどのようなことか、という素朴で根源的な問題を問わざるを得ない事態も生まれました。ヒューマン・コミュニティ創成

研究センターは、人間と人間のつながり、人間と環境のつながりに注目し、今世紀にふさわしい「人間らしさ」を追求する拠点でありたい、と願っています。

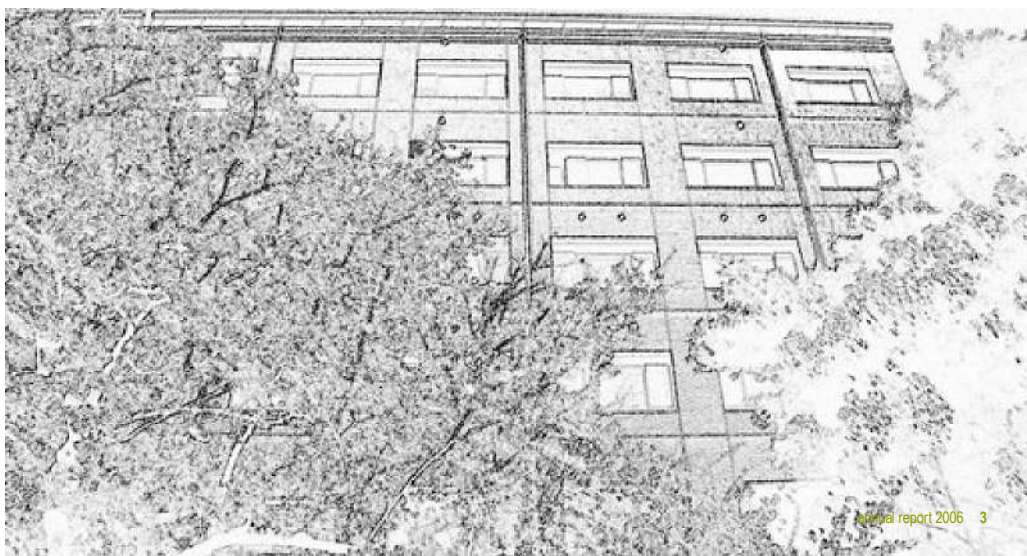
スタッフの最近の活動を少し紹介します。当センターのスタッフ等による「再チャレンジ！女性研究者支援神戸スタイル」が、文科省の「女性研究者支援モデル育成」事業に採択されました。また、現代的教育ニーズ取組支援プログラム（持続可能な社会につながる環境教育の推進）に、「アクション・リサーチ型ESDの開発と推進」と名付けて応募するとともに、ESD（持続可能な開発のための教育）に関係する種々の活動を行っています。

2005年9月には、旧灘区役所の跡地を借用し、サテライト施設「あーち」を設置しましたが、この施設はまさに「街に出る大学」の先端に位置するものであります。当施設では、子育て支援など、社会、地域と密着した実践的な研究活動を行っており、その活動に対して、県からの表彰話が持ち上がるなど、高い評価を得ています。

本アニュアルレポートはヒューマン・コミュニティ創成研究センターおよびサテライト施設での2006年度、1年間の実践・研究を記録したものです。私たちが「街に出る大学」として、この1年間に何を行ったのかを記載しました。多くの皆様方から、忌憚のないご意見やご叱正、さらにはご支援をいただくことができれば何よりの幸いに存じます。



青木 務
(発達科学部長・兼任)



AR

Action Research

2006年度実践的研究の内容

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター（HCセンター）開設2年目の今年度は、昨年度の実践的研究（AR：アクションリサーチ）をさらに発展させると共に、多くの学内外の研究者や実践者の協力を得て、より具体的な活動を多様に推進しました。ARの動きを点から面に広げていくことで、社会的・実践的・研究的協働の波をさらに大きくしていきたいと考えています。

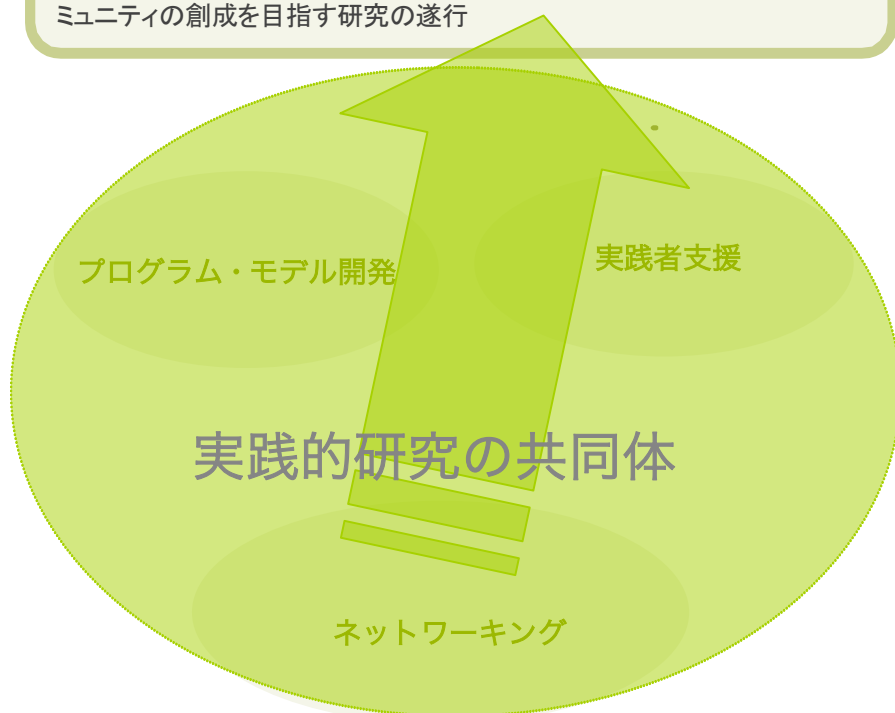
実践的研究の戦略

私たちのとりくむ実践的研究は、研究者や実践者の多様なネットワークをつくるのが基本です。この姿勢はHCセンターの本質に他なりません。ネットワークの力を得ながら、「プログラム・モデル開発」「実践者支援」の2つのカテゴリーに分類できる多様な実践を構築していきます。そして、その実施を通して、さらに新しいネットワークの形成を図っていきます。「ネットワーキング」→「プログラム・モデル開発」「実践者支援」→「ネットワーキング」という循環を重ねることで、実践的研究の共同体（AR共同体）をつくっていくことが、私たちの基本戦略です。

このような実践的研究の遂行によって、HCセンターのミッションである、さまざまな組織や個人と連携しながら、人間性にあふれた多層・多層的なコミュニティの創成をめざします。

センターのミッション

さまざまな組織や個人と連携しながら、人間性にあふれた多層・多層的なコミュニティの創成を目指す研究の遂行



1. プログラム・モデル開発

特定の社会的課題を解決する手法として、人間の発達や認識変容を促すプログラムの開発を行っています。プログラム・モデル開発の効果は、プログラム実施の成果ばかりでなく、プログラム作成や実践組織の組織化、プログラム実施の中で起こる非意図的な副次的効果も重要だと考えます。

そこで、プログラム・モデルを次のような幅広い視点から追究します。

- プログラムが前提にしている価値についての原理的な探究
- プログラムと当該の社会的課題との関係の記述と分析
- プログラム実施のための条件づくりについての記述と分析
- プログラムを実施した際の効果測定
- 反省的事例も含めたプログラム作成過程の記述と分析
- 汎用可能なプログラム・モデルの開発

2. 実践者支援

人間の発達を支援する人たちや、学習者、ボランティア等の活動を支援することを通して、実践者のエンパワメントをめざすとともに、実践者支援の方法、実践の意味づけや課題について追究します。

- 実践者に必要な技能や知識に関する追究
- 実践者の社会的位置や心理・価値の内在的分析
- 実践者支援プログラムの開発・実施・効果測定
- 実践者支援の多様な方法についての考察
- 実践者支援を通じた研究成果の実践化と普及

3. ネットワーキング

特定の社会的課題をめぐる、組織や個人のネットワークを形成することで、多元的な新しい実践的研究のフィールド創成をめざしています。ネットワーキングは、実践的研究の基盤整備という意味もありますが、そればかりでなく、新しい実践を生み出したり、新しい課題を提示したりするというネットワーキング自体のもつ価値にも着目します。



1. プログラム・モデル開発



JKYB研究会「実践につながる心の能力」を育てるライフスキル教育プログラム

喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育プログラムの開発（ヘルス）

ライフスキル形成を基礎とする喫煙、飲酒、薬物乱用防止教育プログラムの3年生版を開発し、新潟県岩船郡の某中学校の3年生を対象として実施した。2007年3月には、教育校と対照校の3年生を対象とした質問紙調査を実施し、有効性を評価した。

ライフストーリーを応用した書の社会的意義に関する実践的研究（労働・成人教育）

国際文化学部の魚住和晃教授と共同で、知的障害のある成人を対象にした書の講座を開催した（前年度からの引継ぎで、2006年3・5・7月の3回「あーち」にて実施）。労働・成人教育支援部門ではライフ・ストーリーを成人教育に応用することによる、成人の学習に関わるアクション・リサーチに取り組んでおり、本実践・研究もその一環をなす。知的な障害のある成人とともに支援者・保護者が共同でそのライフ・ストーリーを聞き、書として書き表すべき「言葉」を見つけた上で、それを筆文字として表現するワークショップを開催した。これは書の側からは、その意義を芸術表現にとどめず、より幅広い意義付けをする試みをなす。

団塊世代の自分作りを目的にしたワークショップの開催（労働・成人教育）

ライフ・ストーリーを成人教育に応用して、団塊の世代の自分作りをテーマとしたワークショップを開催した（2007年2～3月に3回「あーち」にて実施）。自分および夫の退職を目前に控えた団塊世代が、この転機をどう乗り越えるかは人生の「危機」と捉え、この世代を対象にしてライフ・ストーリーによって自分の過去の経験を再構築して、退職後の新たな人生の展望を開くことを目的とした。このワークショップでは、どのような支援が求められるのかを発見すること自体を課題とし、成人教育の方法論としての観点を重視した。

教師のためのセクシュアルハラスメント防止研修プログラムの開発（ジェンダー）

3年間をかけての教員向け研修プログラム開発の2年目が終了した。小学校教師のための参加型研修プログラムを開発し、2006年12月には公立小学校にて試行実践を行い、修正を経て、完成版を作成した。セクハラ研修は実施義務が課されているが、実際には「べからず研修」が多く、また子どもへの「教育」との結びつきも弱いなどの弱点をもっている。開発したプログラムは「セクハラ」と「教育」の結びつきを主体的に考えることができる参加型プログラムである。今後、HP上などでプログラムを公表し、多くの実践を経て、逐次修正していく予定である。

お母さんのための「遊々プログラム」（ジェンダー）

子育て中の母親を対象としたリフレッシュプログラムを「あーち」にて開催した。プログラムは全6回で、1回が2時間程度、保育付とした。一般に、母親対象のリフレッシュ・プログラムは、文字通り「母親がリフレッシュすること」を目的としたものがほとんどであるが、「遊々プログラム」では障害共生も目的のうちに加え、「あーち」の「居場所づくりプログラム」とのコラボレートとした。プログラムへの直接参加者だけでなく、その場に居合わせた人々も「いつのまにか」参加するかたちとなり、試みは成功した。プログラムの評価のために振り返り学習会を開催した。

アウトリーチ事業「産後母子家庭訪問」(子ども・家庭)

地域のコミュニティ・センター(ファミリー・リソース・センター)作りのモデル提示として求められることのひとつは、地域資源をうまく利用できない孤立家庭への対応である。灘区内にある産科施設と連携し、子育てに関する地域資源を妊娠期から親に伝え、出産後は複数回の家庭訪問によって心身の健全さを支えると同時に「あーち」も含む地域資源にその親子をつなぐというアウトリーチ活動を展開した(アウトリーチワーカーは修士1年履修課程の学生で助産師)。特に産後における対象者とワーカーとの支援的交流のあり方が、対象者の「孤立・依存から自立へのプロセス」を支えることを事例的に実証した。

ペアレンティング事業「0歳児のパパママセミナー」(子ども・家庭)

「あーち」を地域コミュニティ・センター作りのモデルとして提示するという部門の研究目標からすれば、ライフサイクルごとの親のニーズに対応するペアレンティング・プログラムは必須である。今年度は0歳児をもつ親を募集し、月齢に応じた親のあり方を2006年5月～12月(月1回)、計8回おこなった。灘区保健福祉部、ろっこう医療生協との連携のもと、当部門の研究員も講師を務めた。次年度は、継続的に参加を希望する親の求めにも応じるという意味もあって「1歳児のパパママセミナー」を実施する予定である。これと、次年度に再度おこなう予定の「0歳児のパパママセミナー」とを並行させることで、ペアレンティング事業をより充実・発展させていきたい。

次世代育成プログラム「赤ちゃんふれあい体験学習」(子ども・家庭)

神戸市からの委託・助成(平成18年度 命の感動体験)を受け、灘区保健福祉部、神戸市教育委員会(灘区内の小学校長会)との連携によって「あーち」で実施した。学習体験者は灘区内にある複数の小学校から参加した4年生・5年生であり、ふれあいの協力者は「0歳児のパパママセミナー」受講者と赤ちゃんであった。2006年5月～12月(月1回、計8回)の長期的なふれあい体験の効果を検討した。次年度は、対象者を中学生として、この体験学習プログラムの長期的効果を検討すると同時に、学校を中心とした地域資源による次世代育成事業・研究のためのネットワークに発展させていく予定である。

ボランティア創成事業(ボランティア&子ども・家庭)

山口県生涯学習センターとの共催で「山口しょういん楽校」の「中高生リーダーシップ育成セミナー」(8月2日～11月12日)を開催し、体験型学習プログラムのモデル開発を行った。夏の2泊3日の合宿から、地域ボランティア活動、秋の中間まとめ会(10月)、最終合同評価会(11月)にいたる合宿・体験型のプログラムを、同センタースタッフ、在神戸のNPOスタッフおよび他大学の教員と協働して策定・実施し、関係者参加型という新しい評価方式を開発した。成果は、日本福祉教育・ボランティア学習学会第12回研究大会において報告した。2007年度はさらにバージョンアップさせ、「ESDボランティア塾—ぼらぼん」事業を展開する予定である。

大学生・高校生・野宿者交流支援事業(ボランティア&ジェンダー)

カトリック社会活動センター(神戸市)の協力を得て、高校生・大学生がホームレス支援活動の現場に参加する体験型プログラムを実施した。キャリア形成に影響を与え得る体験学習の構想を目的に、大学生が主体となって、事前調査を実施し、事前プログラム・現



小学生の赤ちゃんふれあい体験



中高生リーダーシップ育成セミナー

Action Research 2006年度実践的研究の内容

場参加・事後プログラムを企画・実施した。ワークショップ・ワークシートなどを用いてデータを収集した結果、ホームレスへの認識、自己との関係性、社会構造の問題などの「当事者性の深化」が確認された。

高校生とフリーターの交流支援事業（ジェンダー&ボランティア）

高校生とフリーターの仕事に対する意識調査を行うとともに、フリーターと高校生がデータを介して交流する「出会いのプログラム」事業を実施した。HCセンターと神戸大学「発達ホール」を使ってワークショップを実施し、談話分析・感想文分析によって効果測定を行った。成果は、日本社会教育学会第52回大会において報告した。神戸大学フリーター支援システム研究会『高校生の仕事観・フリーター観をふまえたキャリア教育実践に関する調査研究』神戸大学HCセンター（2007.2）にまとめた。データ対話型実践の可能性を提示した。

居場所づくりプログラム（障害共生）

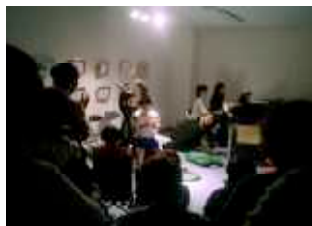
インクルーシブな地域社会に向かうための拠点として毎週金曜日の午後16時に「のびやかスペースあーち」で実施。自分だけでは遊びを展開できない障害のある子どもが他者との関わりの中で十分に参加し楽しむことができるための支援を中心としている。「あーち」の他のプログラムとも一体化して、障害のあるおとなや保護者、障害のないおとなや子ども、ボランティアなどが集まり、楽しみながら相互の関係づくりをしている。また、インクルーシブな場面がどのように展開していくかということなどをテーマとしたアクションリサーチの場でもある。



居場所づくりプログラム

音楽の広場（障害共生）

「のびやかスペースあーち」で月1回実施している音楽プログラム。音楽の力を最大限に引き出すことのできる場をつくり、参加者相互の関わりを活性化することで、「共生」の理念に近づくことをめざす。「あーち」での他のさまざまなプログラムとの相乗効果もあり、多様な関係形成の場となっている。音楽に関心や理解の深い学生や卒業生がプログラム開発に参画している。



音楽プログラム

アートを介した共生のまち創成（障害共生）

「のびやかスペースあーち」において、さまざまな芸術家などの協力を得ながら、地域文化の継続的な活性化支援を行った。特に月3回の金曜日は定期的に自由な造形の場をつくり、主に子どもたちの表現活動の展開を見守っている。また、地域において表現活動を支援する人たちの養成も試み、実践の場の広がりを図ろうとした。



折り紙遊び

博物館機能を生かした共生のまち創成（障害共生）

「のびやかスペースあーち」において、地域社会に即した新しい価値の創造をめざす博物館実践を試みている。06年度は、知的障害のある人たちの作品展を2回、ハンセン病療養所入所者の作品展、学生のパフォーマンス、出張水族館、白血病で亡くなった子どもの作品展などを行った。これらの大半は、神戸大学発達科学部博物館学芸員資格課程との連携事業である。

サイエンスカフェ神戸（プロジェクト研究）

科学技術的課題に対する市民のエンパワーメントの社会的仕組みに関する実践的研究の一環として「サイエンスカフェ神戸」を開催している。市街のカフェなどの場で、専門家と市民が科学技術に関する話題などについて語り合うもので、平成18年度は、17回開催した。また、大学等の支援のもとでの市民自身による調査・研究の可能性と、本プロジェクトと「持続可能な発展のための教育」（ESD）とのつながりについての検討を行った。

2. 実践者支援

発達科学部公開講座「健康教育ワークショップ」(ヘルス)

思春期の危険行動の防止に関心を持つ専門職を対象として、ライフスキル形成を基礎とする健康教育の理論と実際について体験的に学び、指導に際して必要なスキルを形成することを目的とした公開講座を、2006年11月に開催した。

「専門職等」支援(子ども・家庭)

兵庫県下各地域の子育て支援関係の実践者を対象に、地域で子どもを育てる家庭を支援することの意味とそのあり方に関する講演会の講師を複数回つとめた。また、青少年の社会教育関係の実践者を対象に、統計学にもとづくアンケート調査の方法をセミナー形式で指導した。

新規就農者を対象とした『農業・知る場カレッジ』への支援事業(労働・成人教育)

部門の研究活動として、兵庫県龍野農業改良普及センターで担当職員の北郁雄氏が中心になって取り組んだ、『農業・知る場カレッジ』についての実践研究をした。新規就農を希望する受講生にライフ・ストーリーを応用するプログラムを組んだ北氏にそのつどの進捗状況の報告を受け、その実施の過程や成果の評価について実践的な研究を行った。

株式会社ワークスタイル研究所の『シニア・セカンドライフ講座への支援』(労働・成人教育)

ワークスタイル研究所の堂馬英二氏が中心になって開かれた、兵庫県立神戸生活創造センターの主催事業「50代から考えるセカンドライフ」で、ワークショップの一部にライフ・ストーリーを取り入れるに当たっての支援を行った。堂馬氏は、従来から独自に「自分語録」という手法を開発してきたが、本部門の研究員の立場でこの手法をライフ・ストーリーの一種として捉えなおし、その実践的な発展をこのワークショップで試みた。

福祉教育キャラバン隊事業(ボランティア)

京都府社会福祉協議会との協働で「福祉でまちづくり・福祉教育キャラバン隊事業」を行った。福祉教育のモデル形成を目的に、市町社会福祉協議会職員と日帰りミーティング3回、合宿検討会2回を開催。京都府の福祉教育実践への参与観察を通して実践を共同で評価すると共に、メンバーそれぞれが実施している福祉教育プログラムの特性・課題を整理した。2007年度も回数・メンバーを増やして実施し、日本福祉教育・ボランティア学習学会において活動の効果を報告する予定。

インクルージョン学習会(障害共生)

「居場所づくりプログラム」と連動させる形で実施した公開学習会。社会的排除をどう捉えるか、社会的排除に抗する実践の理念としてソーシャルインクルージョンの試みは具体的にどうあるべきなのか、個別的なケアとインクルージョン理念との関係はどうなのか、といった論点について、松友了氏、松波めぐみ氏、末本やすみ氏、横須賀俊司氏を講師として招き4回にわたって実施した。



ワークショップの様子



福祉教育キャラバン隊

Action Research 2006年度実践的研究の内容

知的障害のある人たちのセルフアドボカシー支援（障害共生）

知的障害のある成人が社会にある矛盾を認識し、それを社会に対してアピールしていく活動を組織化し支援している。特に、自分たちの生活世界を地域に伝えることを目的とした新聞発行支援を行っている。

3. ネットワーキング

ネットワーキング・イニシアティブ

神戸大学「男女共同参画推進室」の立ち上げ支援（ジェンダー）

平成19年2月に神戸大学の学長直轄の室として「男女共同参画推進室」が設置された。同室の設置にあたり、HCセンターで蓄積してきたノウハウを役立てることができた。すなわち、同推進室での年間事業計画の策定と実施のための人員につき、知見提供と人的ネットワークを提供し、室長へのアドバイスをを行った。

成人教育に関する異業種交流の推進（労働・成人教育）

昨年度からの本部門の基本的な活動として、成人教育に関わる多様な「現場」の教育的支援を本務とする関係者の交流を基にした、成人学習の原理に関わる実践的な研究活動に取り組んでいる。公民館・企業・コンサルタント・組合関係・農業改良普及員・放送大学関係者など、本来関係がないと思われる領域の教育的職員が参加して、それぞれの経験を交流しながら、ライフ・ストーリーを共通の方法論として実践的に成人の学習についての研究に取り組む活動を、定例の研究会として展開した。



ふらっと（おひさま）



ふらっと（赤ちゃんマッサージ）

ドロップイン事業「ふらっと」（子ども・家庭）

当部門の基幹目標が子育て支援の1次予防であり、ドロップインはそのための基盤事業である。今年度も、昨年度と同様、「六甲道児童館（週1日）」および本研究科サテライト施設「あーち（火曜日～土曜日 週5日）」において、ドロップイン・サービス「親と子のくつろぎ空間 ふらっと」を提供した。相談員等については、神戸市灘区保健福祉部、神戸市地域子育て支援センター灘（おひさま）、神戸市灘区内の8保育所（分室を含む）、神戸市シルバーカレッジ、神戸市東灘区NPO法人マザーズサポーター協会の協力を得た。今後も、さらに多様な機関・団体等と連携を図りながら、基盤サービスの充実とネットワークの発展を図っていきたい。

ESDボランティア育成プログラム推進ネットの立ち上げ（ボランティア）

2006年12月、阪神間のNPOのリーダーやボランティア団体スタッフ、他大学教員、施設職員と協力して、ボランティア活動をESD（持続可能な開発のための教育）の具体的方法としてプログラミングすることを目標とする「ESDボランティア育成プログラム推進ネット」を立ち上げた。2007年3月現在、世話人21名、協力者10名、協力団体15団体。2007年度「ESDボランティア塾—ぼらぼん」事業の推進を通して、さらにネットワークが拡張・充実することを企図する。

少子化問題研究部会（子ども・家庭）

神戸大学経済経営研究所と兵庫県が結んだ「少子化問題に関する調査・研究についての

Acti on Research 2006年度実践的研究の内容

協力協定書（2006年11月18日）」にもとづいて組織化された、少子化問題研究部会の研究員として、経済経営研究所および兵庫県との研究交流に参画した。

知的障害者の地域生活を支える中間施設の意義と方法に関する国際比較研究集会（障害共生）

2007年2月3日に、イギリス、韓国、仙台、大阪などの実践者・研究者を講師として招き、各地での取り組みやその背景について論及しながら、知的障害のある人たちの地域生活を支える「中間施設」の意義や機能について議論を展開した。なお、「中間施設」は、あらゆるセクショナリズムの枠を越えた施設という意味であり、分散した人や資源を結びつけることで地域社会を変容させていく戦略的拠点として概念化した。公開研究集会であるため、各地から知的障害のある人たちの地域生活支援に関わる人たちが集まり、ネットワーク形成がなされた。

研究会組織の立ち上げ（ヘルス）

ワークショップの参加者（教諭、養護教諭、栄養士、大学教員等約250人）で構成する研究会を組織し、ニュースレターの発行（年4回）、各地での学習会の開催などの活動を行っている。



新潟県内中学校での公開講座の様子

連携・協力

- 福島県、福岡県の各教育委員会と共同して、ヘルスプロモーションの指導者養成のための研修会の計画を立案し、実践した。（ヘルス）
- 神戸市より放課後児童健全育成事業計画検討委員会の委員長に委嘱された。（子ども・家庭）
- 兵庫県より、阪神子どもの館（仮称）整備検討委員会の委員を委嘱された（子ども・家庭）。
- 神戸大学経済経営研究所と兵庫県が結んだ「少子化問題に関する調査・研究についての協力協定書（2006年11月18日）」にもとづいて組織化された、少子化問題研究部会の研究員を委嘱された。（子ども・家庭支援部門）
- 文部科学省より「新教育システム開発プログラム事業」の委託を受けた（株）キャリアリンクが実施した「ネットワーク型教員養成のあり方についての調査研究」に協力した。（ジェンダー、子ども・家庭）
- 伊丹市男女共同参画施策市民オンブードとして、伊丹市の施策実行について検証、評価した。（ジェンダー）
- 大阪市「クレオ大阪中央研究室」の運営に評価、協力した。（ジェンダー）

学外協力者

小豆澤千穂(明石市立高齢者大学校あかねが丘学園)
 新崎国広(大阪教育大学)
 池田真理子(福山市教育委員会)
 池見宏子(NPO法人神戸子どもと教育ネットワーク)
 石崎和美(むこがわCAP)
 石原勝利(久御山町社会福祉協議会)
 石原佳子
 一居明子
 井上富美子
 植戸貴子(神戸女子大学)
 上野智歳(宇治田原町社会福祉協議会)
 大澤欣也(人権擁護委員)
 大野須美子
 小川 旦
 小河洋子(豊中市男女共同参画センター)
 小田桐和代
 折出 健二郎(貝塚市立中央公民館)
 加地倫子
 片岡正純(綾部市社会福祉協議会)
 勝野眞吾(兵庫教育大学)
 川島弓枝
 川谷和子
 菊地美加
 北 郁雄(兵庫県龍野農業改良普及センター)
 北林 稔
 北村米子(京都市立深草中学校)
 切山 彰(榊富士ゼロックス総合教育研究所スペースアルファ神戸)
 栗原英文(J P c o m)
 河野 尊(研究会「職場の人権」)
 小島篤子
 小林 繁(明治大学)
 坂井 満(小郡市立立石中学校)
 坂田雅亜子(社会福祉法人たんぼぼ)
 佐々木 寛(広島市立瀬野川中学校)
 澤田幸代
 末本やすみ
 杉本恵美子
 須田 和(尼崎市立女性・勤労婦人センター)
 砂田枝里(兵庫県)
 住吉八重子
 高島 昭(県立農林水産技術総合センター)
 高島順子(チャレンジひがしなだ)
 高橋 爾
 橋 裕子(ぶちばんそー)

立岡佐智央
 田中賢作(フリースペース「SAKIWAI」)
 近森けいこ(名古屋学芸大学)
 塚本 武(富里市立浩養小学校)
 寺地邦子(伊丹市立鴻池小学校)
 堂馬英二(ワークスタイル研究所)
 外川澄子(足立区立平野小学校)
 中 正勝
 中井サチ子
 中野 均(朝日村立塩野町小学校)
 中林洋亮(京田辺市社会福祉協議会)
 永原郁子
 並木茂夫(川口市立十二月田中学校)
 西岡伸紀(兵庫教育大学)
 西村恵子
 西村いつき(豊岡農業改良普及センター)
 丹羽康子(NPO法人くじら雲)
 沼館園子
 沼館和明
 納富千佳子
 野口 緑(尼崎市役所国保年金課 健康支援推進担当)
 能勢伸子
 濱田格子(伊丹市女性交流サロン)
 原田正樹(日本福祉大学)
 橋本久仁彦
 春木 敏(大阪市立大学)
 東五十川澄子(井手川町社会福祉協議会)
 東口たまき
 平湯秀子
 藤本優子
 前田真弥子
 梶見和孝(放送大学兵庫学習センター)
 峯田美香(NPO法人アートフルF)
 三村裕一
 宮木 昭
 村上元良(綾部市立中筋小学校)
 山根健也
 山根弘子
 横須賀俊司(広島女子大学)
 吉田 聡(大津市立堅田小学校)
 吉本尚子(兵庫県立男女共同参画センター)
 鷺見有美
 渡辺 潔(胎内市立乙中学校)
 渡邊一真(SAL)

学内協力者

【教員】	【学生】
石川哲也	一橋和義
伊東恵子	今出友紀子
伊藤真之	今西有希菜
稲場圭信	大藪明子
太田和宏	久門加代子
岡田由香	古賀溪子
岸本吉弘	小嶋詠子
木下孝司	清水伸子
佐々木倫子	高田オリエ
白杉直子	沼田里衣
鈴木幹雄	橋倉今日子
高橋 真	原田賢明
塚脇 淳	福井純子
勅使河原君江	湊田陽子
中林稔堯	水野淳子
中村晴信	宮脇真衣
目黒 強	安田育子
若尾 裕	米崎瑛子
和田 進	頼田 稔
	小林洋司

岸本佳子(発達科学部附属幼稚園)
 喜多淳子(医学部)
 高田 哲(医学部保健学科)
 本間康浩(工学部)

研究・実践のさらに詳しい情報を知りたい方は、下記の媒体をご参照いただけます。

- ・伊藤篤(2006)福祉教育実践をどう見るかー実践の効果測定に焦点をあててー『2005年度科研費第二次報告書(代表:原田正樹)福祉教育実践をどう見るか』26-29頁
- ・伊藤篤(2006)ブリティッシュコロンビア州における子ども家庭支援(カナダ)ー多様な属性とニーズをもつ子どもと親(家庭)へのコミュニティ支援ー
- ・伊藤篤(2007)みんなのニーズをコミュニティ(1か所)でみたそう! (第II部 少子化と私たちの未来)『協定締結記念シンポジウム(主催:神戸大学経済経営研究所・兵庫県)少子化時代を生きる』神戸大学経済経営研究所 発行 65-71頁 92頁 101-102頁
- ・伊藤篤(2007)量的データを複数の参加者で質的に検討・解釈する試みー「青少年のリーダーシップ育成セミナー」における体験的学習者の自己変容を事例としてー『2006年度科研費第二次報告書(代表:原田正樹)福祉教育実践をどう見るか』31-37頁
- ・寺村ゆかの・川谷和子・伊藤篤(2007)地域連携にもとづく次世代育成プロジェクト「赤ちゃんふれあい体験」の短期的効果に関する研究 『保健の科学』 49巻1号 71-77頁
- ・伊藤篤(2007)2006年度 神戸市委託事業報告書 「いのちを実感し親になることを考える体験学習」プロジェクト(II)報告書 神戸大学大学院総合人間科学研究科 ヒューマンコミュニティ創成研究センター 子ども家庭支援部門報告書 全28頁
- ・津田英二編(2007)『インクルーシヴな地域社会をめざす拠点づくり』 神戸大学大学院総合人間科学研究科 ヒューマンコミュニティ創成研究センター 障害共生部門報告書 104-110頁
- ・津田英二(2006)「支えあう人間」ヒューマン・コミュニティ創成研究センター編『人間像の発明』ドメス出版
- ・津田英二(2006)『知的障害のある成人の学習支援論』学文社
- ・津田英二(2006)「地域におけるインクルーシヴな学びの場づくりの可能性と課題」『日本社会教育・ボランティア学習学会年報』Vol. 11 63-82頁
- ・JKYB研究会(代表 川畑徹朗)編著(2006)「実践につながる心の能力」を育てるライフスキル教育プログラム 東山書房
- ・小川育美,川畑徹朗,西岡伸紀(2006) 中学生の家族関係および友人関係に関するセルフエスティームと喫煙,飲酒行動の関連 学校保健研究47(6) 525-534頁
- ・松岡広路(2006)『生涯学習論の探究』学文社
- ・松岡広路(2006)福祉教育・ボランティア学習の新機軸『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報Vol. 11』万葉舎
- ・Makoto SUEMOTO (2006) Culture traditionnelle et jeune génération à Okinawa. Martine Lany-Bayle et Marie-Anne Mallet, Evénements et formation de la personne. Tome 2, pp. 103-126, L'Harmattan, Paris
- ・Makoto SUEMOTO (2006), Des événements de la vie comme un cours d'histoire sociale. Martine Lany-Bayle et Marie-Anne Mallet, Evénements et formation de la personne. Tome 1, pp.59-70, L'Harmattan, Paris
- ・末本 誠(2006)「ライフ・イベントと世代間の交流——沖縄を例に」(『東アジア社会教育研究』東京・沖縄・東アジア社会教育研究会 第11号

のびやかスペース あーち

ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設で、たくさんの組織や個人が協力して、「子育て支援をきっかけにした共生のまちづくり」をめざす実践的研究の拠点です。



赤ちゃんふれあい体験学習

0歳児のパパママセミナーや1歳児のパパママセミナーとセットになった「小中学生の赤ちゃんふれあい体験学習」は、3年間にわたり神戸市からも事業委託を受けている次世代育成のための長期プログラムです。



ふらっと

ふらっと（ドロップイン）は、親が子どもを遊ばせながら、親として成長していく場です。保育士さんによる「おひさまひろば・あーち（写真）」も人気のあるショートプログラムのひとつです。



ミュージアム

「あーち」での取り組みのひとつにミュージアムがあります。博物館学芸員資格のための実習も絡め、さまざまな資料展示による新しい価値の発見をめざしています。



地域に居場所や関係をも
ちにくい人たちが特に対
象とした、誰でも参加し
て楽しめる場づくりに取
り組んでいます。

居場所づくり



みんなで支える「あーち」

毎月一回発行の「あーち通信」は、利用者や学生が中心になって作成しています。年末の大掃除も利用者を交えて楽しく取り組みました。

その他にも、畑で野菜を作るサイ
エンスプログラム、関東からの修
学旅行生受け入れ、地域のまつり
への参加など、多彩な活動を続け
ています。

さまざまな活動



表現活動

「あーち」では、多様な自己表現の支援を通して、相互の関わりを活性化しようとしています。造形・音楽・ダンスのプログラムを継続的に実施しています

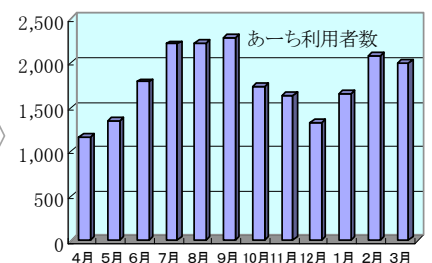


のびやかスペース あーち

- 住所：神戸市灘区神ノ木通3-6-18
- 交通：阪急六甲駅、JR六甲道駅、各15分
- 三宮、阪急王子公園駅、JR六甲道駅から市バス「將軍通」バス停下車すぐ（灘消防署の建物の2階）
- 開館日：火曜日～土曜日（祝日は休み）
- 開館時間：10時半～17時（金曜日は18時半）

■ホームページ <http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/arch-prep.html>

2006年度の年間利用者は、21,490人。1日平均90人近くの利用者がいました。



Science Cafe KOBE



ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのプロジェクト研究「市民科学に対する大学の支援に関する実践的研究」の取り組みのひとつとして、サイエンスカフェ神戸を開催しています。サイエンスカフェは、街のカフェなどでコーヒーを片手に気軽に科学の話題について語ろうという試みです。1998年にイギリスで始められ、世界のさまざまな街にひろがっています。

サイエンスカフェ神戸は、お洒落な喫茶店、酒蔵を改修した木造のホール、美術ギャラリー、博物館や美術館の喫茶室など、さまざまな場所で開催されます。

小学生からはじまって、学生、OL、隠れ科学ファンの主婦の方、リタイアした技術者の方、友達どうしで、ご夫婦で、親子で、兄弟で、・・・、いろいろな方がご参加くださっています。運営にも、市民や学生が参加しています。

私たちは、地域社会に「文化としての科学」が根づくことを願い、「神戸の街では、いつもどこかの喫茶店で科学が語られている」、そんなビジョンを思い描いています。



2006年度には、下記のようなテーマで17回開催しました。(他の団体との共催を含みます)

- 第12回 (06/04/15) 「地球にやさしい高分子」
- 第13回 (06/04/23) 「市民参加の生物環境保全－何をめざすか？」
- 第14回 (06/05/28) 「遺伝子をみる」
- 第15回 (06/06/11) 「麻耶山城－教科書に載らない裏山の歴史－」
- 第16回 (06/06/22) 「星界のルネサンス」
- 第17回 (06/07/29) 「カオスをみる」
- 第18回 (06/08/06) 「幻のヘリコプター 昭和初期・高砂のダヴィンチ」
- 第19回 (06/09/15) 「点と線に隠れた数学を話そう」
- 第20回 (06/09/25) 「劣化ウランという問題群－医学の視点、科学の視点を通して－」
- 第21回 (06/10/08) 「光が拓く新しい計測技術－ナノサイエンスから医療診断まで－」
- 第22回 (06/10/14) 「ナノテクノロジーと電子の世界」
- 第23回 (06/11/18) 「これでよいのか『21世紀のそろばん』教育」
- 第24回 (06/12/10) 「電気の歴史をみてみませんか？」
- 第25回 (06/12/16) 「太陽系の外縁部－氷の世界－」
- 第26回 (07/01/27) 「バイオテクノロジーの歴史とこれから－お酒から薬まで－」
- 第27回 (07/01/27) 「地球温暖化問題を考えるⅡ」
- 第28回 (07/02/04) 「ロボット開発と社会～社会実証実験の取り組み」

サイエンスカフェ神戸ホームページ：<http://scicafe.h.kobe-u.ac.jp/>

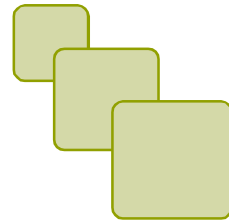


■市民科学に関する大学の支援に関する実践的研究

伊藤 真之(発達科学部 環境基礎論)
小川 正賢(発達科学部 教育・学習論)
武田 義明(発達科学部 環境基礎論)
丑丸 敦史(発達科学部 環境基礎論)
田結庄 良昭(発達科学部 環境基礎論)
田中 成典(自然科学研究科 地球惑星システム科学専攻)

近江戸 伸子(発達科学部 環境形成論)
蛭名 邦禎(発達科学部 環境基礎論)
白杉 直子(発達科学部 環境形成論)
長坂 耕作(発達科学部 環境基礎論)
讃岐田 訓(京都学園大学/神戸水環境研究所 水環境研究)
信川 貴子(ひょうご環境科学研究所)

出版プロジェクト



【出版プロジェクト企画書】

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター（HCセンター）では、人間らしさのあふれるコミュニティを創成するための実践的研究を出版物としてとりまとめて世に問う「出版プロジェクト」を推進しています。2006年度はHCセンターの研究実践の前提にある「人間」そのものに焦点をあてて多角的・学際的に検討した成果を刊行しました。

【本号の内容】

本書は、「人間像」という概念を軸として現代社会の複雑な問題をさまざまな研究分野から考察しています。多くの場合、思考や実践は「あるべき人間の姿」を前提にしてきましたが、それは明示的には語られませんでしたが、この隠された「人間像」こそ、時代や社会のありかたとともにつくられ、改変され、そして利用されてきたといえます。

複雑化した現代社会のかかえる深刻な諸問題から「人間そのもの」を解放するには、「人間像の発明」の生成過程を丹念に検討していく作業が求められているといえます。人間像の「発明」の仕方によどのような力学が働くのか。思想、文学、心理、教育、ファッション、都市計画、開発、社会学、障害者支援と、専門を異にする著者がそれぞれの領域で、具体的な主題の分析を通して論じています。常に理論的・抽象的な視覚からのみならず、実践的な取り組みを前提にした考察をしています。市民活動や社会実践に携わる方にも読んでいただきたいと思います。

【目次 詳細 — 著者】

- 第1章 怯える人間—橋本直人
他者憎悪の暴力とアイデンティティの不安
- 第2章 健康な人間—白水浩信
衛生的配慮と予防のユートピア
- 第3章 怖れられる人間—目黒 強
谷崎潤一郎と不良少年の近代
- 第4章 理解されたい人間—木下孝司
「心の理論」の進化と発達
- 第5章 着飾りたい人間—平芳裕子
ファッションをめぐる欲望とは
- 第6章 分類される人間—平山洋介
都市再生の様相から
- 第7章 開発される人間—太田和宏
第三世界の現場から
- 第8章 取り残された人間—浅野慎一
中国残留孤児にみる批判的国民主義と脱国民国家化
- 第9章 支えあう人間—津田英二
自律的關係形成に向けた実践的研究の試み

発行日 2006年10月31日

発行所 ドメス出版

定価 3,150円

ISBN4-8107-0673-7

センター概要

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター (HCセンター) とは

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下、HCセンター）とは、神戸大学大学院総合人間科学研究科に設立された発達支援インスティテュートのもとにあり、これまで蓄積されてきた研究成果と、地域などですで行われている実践との間に、太いパイプをつくっていかうとするものです。人間の発達支援にかかわる活動を行っている地域組織、NPO、NGO、企業、行政、学校等の人々と連携しながら、研究・実践を深め、人間性にあふれた多層・多面的なコミュニティの創成をめざします。

HCセンターには6名の専任教員がおり、それぞれ基幹部門を運営しています。6つの基幹部門ではさまざまなプロジェクトを展開しており、それらに2つのプロジェクト研究（2006年度現在）が加わって、HCセンターの多様な実践的研究を構成しています。各プロジェクトは、リーダーと学内及び学外の研究員・協力員が担っています。

また、すでに企業、自治体、学校、NPOなどで活躍中の社会人を対象とした一年制修士課程も設けられています。発達支援に関する、さらに高度な実践的、専門的な知識や技法のスキルアップを行い、現代的課題に対応する社会活動に資する人間の育成をめざしています。

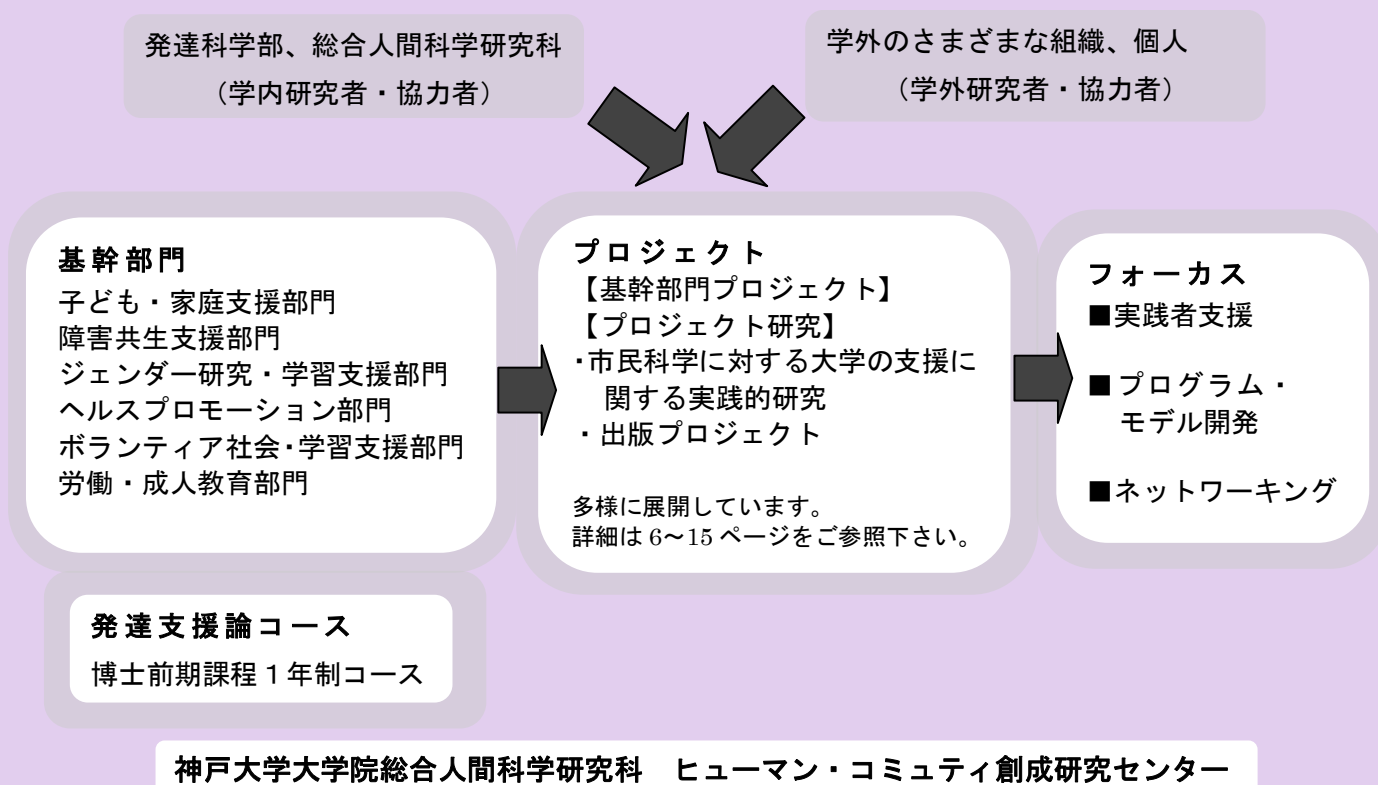
一年制修士課程とは

HCセンターと密接に関連する大学院として「1年制履修コース」があります。このコースは、「ヘルスプロモーション」「子ども・家庭支援」「ボランティア社会・学習支援」「障害共生支援」「労働・成人教育支援」「ジェンダー研究・学習支援」のいずれかの領域の実践活動の実績をもつ社会人を対象としています。学生はすでに行ってきた実践活動をより広い視野の下でまとめ、考察することにより、修士の学位を取得することができます。

授業は基本的に夜間に開講し、HCセンターで行っている実践的研究にかかわりながら1年間で所定の単位を取得した上で、リサーチペーパー（修士論文）を提出することが求められます。

社会的実績をもとにした学位（修士）を得たい方、自らの実践活動の成果をまとめて一層の前進をはかりたい方は是非、ご応募ください。

（詳細は学生掛まで問い合わせ願います。電話：078-803-7924）



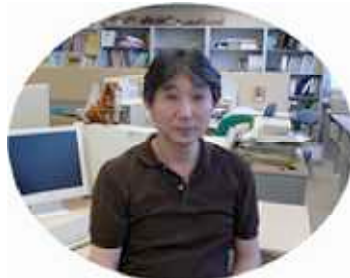
※2007年4月より「総合人間科学研究科」は、「人間発達環境学研究科」に名称変更いたしました。

各部門の概要

子ども・家庭支援部門

担当：伊藤篤

ittoa@kobe-u.ac.jp



HCセンターのデスクにて

2005年度に引き続き、今年度も、本研究科サテライト施設「のびやかスペース あーち」を主たる拠点として、子どものいる家庭およ

び家族的機能をもつ諸施設の養育活動を支援することを通し、周産期から青年期までの子どもとその親や養育者の発達を保障するための実証的研究および実践的研究をおこなった。具体的には以下の4つの事業を中心に研究した。

当部門の基盤サービスであるドロップイン事業(あーちおよび六甲道児童館にて実施)の内容や協力者とのネットワークの充実を図った。今年度の「あーち」にける「ふらっと」利用者数(4月～3月の1年間)は、親が6,898人、子どもが7,580人、計14,478人であり、1か月平均1,206人(1日平均60人・30組)であり、「あーち」総利用者に占める割合は67.4%であった。

次世代育成事業として、命の大切さを学ぶ機会や子育てや子育て家庭に対する肯定的な態度を形成する機会を提供するプログラム「赤ちゃんふれあい体験学習(月1回・8か月間)」には、約30名の小学4年生・5年生が参加した。これについては、前年度の小学校における短期的効果の検討に引き続き長期的効果の検討をおこない、その研究成果は報告書としてHCセンターのホームページに掲載されている。

また、この「赤ちゃんふれあい体験学習」と対応させる形で実施したペアレンティング事業としてのプログラム「0歳児のパパママセミナー(月1回・8か月間)」にも、約

30組の親子が参加した。参加者である父親と母親は、赤ちゃんの月齢に応じた親としての対応のあり方を積極的に学んでいた。

さらに、産科施設との連携のもと、試行的な実践としておこなったアウトリーチ(ホームビジット)事業においては、相談ニーズにタイミングよく対応すること、複数回の産後母子家庭訪問、地域資源への同行参加などが、孤立家庭の依存から自立へのプロセスを支えることを実証した。今後、本格的な事業として位置づけたいと考えている。なお、この事業の成果は、様々な講演会やセミナーなどで紹介している。

その他、部門研究の成果は、神戸市の「放課後児童健全育成事業計画検討委員会」、兵庫県の「阪神子どもの館(仮称)整備検討委員会」といった行政施策の方向性にも反映されている。

障害共生支援部門

担当：津田英二

zda@kobe-u.ac.jp



居場所づくりキャンプにて、とあくんが撮影

社会の中で生きていくすべての人が排除されることなく幸福を追求できる社会づくりについて、実

践的に研究・教育に取り組んでいます。中でも特に、障害のある人たちのインクルージョンのプロセスを支援することに努めています。社会的排除を受けている人たちが、社会に関わり社会の中で幸福を追求できるようになっていくためには、社会的排除を受けている本人が、排除・抑圧の存在を社会に訴えていくとともに、社会の側がそれを受け止めて容容していくという営みが不可欠です。その実現のために、次のような実践的研究を行っています。

- ①「のびやかスペースあーち」や、そこでのインクルーシブな場づくりのプログラムの運営を通して、実践モデル形成の足場をつくっています。毎週金曜日の「居場所づくり」を中心に、多様な人たちが知り合い学ぶ実験的プログラムを展開し、インクルーシブな場の展開過程の分析に力を注ぎました。「居場所づくり」は、地域における居場所をもちにくい人たちに対して、さまざまな人たちとの交流や協働への参加を支援していくというコンセプトのプログラムで、障害のある子どもたちを中心にして、集まっている人たち全員にとって意味ある場を形成しています。また、こうした実践を背景として、4回にわたって講師を招き「インクルージョン研究会」を実施しました。
- ②社会的排除を受けている人たちの自己表現の支援を中心とした、多様なプログラムのためのネットワーク形成や実践を展開しています。知的障害のある成人の新聞づくり支援の他、アート、ダンス、音楽のプログラムを定期的実施しています。
- ③インクルーシブな地域社会づくりに向けた国内外の取り組みをつなぎ、実践・研究面で交流して相互に高めあう活動をしています。9月にイギリスのオープンユニバーシティの研究集会以「あーち」での実践の意味やその基盤となっている日本社会の状況や思想を紹介・検討しました。また2月には、国際研究集会を開催し、国内外の実践者・研究者との交流を深めました。

その他詳細は、<http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda>をご参照ください。

各部門の概要

ジェンダー研究・学習支援部門

担当：朴木佳緒留

hounoki@kobe-u.ac.jp



自宅にて

2006年度は、「教師のためのセクハラ防止研修プログラム」開発2年目であった。10名の部門研究員の実践と知見を基に、学校現場の事情と要請にかなうプログラムを作成し、2006年11月に公立小学校にて試行した。試行結果は上々であり、参加者アンケート等により「使えるプログラム」とすべく、修正した。この「セクハラ防止研修」には、実は「ジェンダー問題学習」が含まれている。「セクハラ防止研修」が単なる「べからず研修」とならないようにすること、また、教師が「学びたい」と思うことがらを伏在させておくことが今回のプログラム開発の主旨である。「セクハラ防止研修プログラム」自体は、すでに数多く開発されているが、必ずしも「ジェンダー問題への理解」が「セクハラ防止」と結合されているわけではない。ほぼ義務づけられている「セクハラ防止研修」が、教師の「学びの場」となることは期待されてはいても、具体的な配慮と工夫が行われているわけではないのである。

「ワーク1」と名付けたこの研修（学習）プログラム開発を通して、プログラム開発が実に多くの手間暇を必要とするか、再確認できた。部門研究員はすでに参加型の学習支援（活動）の実践者であり、プログラム開発の手法を身につけた経験者でもある。そのため、部門研究活動はスムーズに展開するものの、実践を理論化する、または経験を一般化するためにはある種の「飛躍」を必要とすることも同時に確認できた。「理論と実践の

行き来」を「現実の場」を舞台に実施し、「使えるプロダクト」を作り上げることはヒューマン・コミュニティ創成研究センターの役目の一つである。2007年度には、この経験を手がかりに、複数の「ワーク」を開発し、ビビッドな「使えるプロダクト」がいかにして生産されるのか、手探りではあるが探求してみたい。開発した学習プログラムはHPでも公表する予定であるが、学習プログラムが一人歩きすることをどう防ぐか、なお課題である。実施、普及に際しては困難な課題があると言わざるを得ない。

ジェンダー研究・学習支援部門のもう一つの課題は「女性労働問題」の学習化である。2004年から始めている「職場のジェンダー問題」の分析は緒についたばかりであり、その結果は『神戸大学発達科学部研究紀要』（2006、2007）に掲載している。部門研究としてさらに発展させるべく、志ある実践家、研究者を求めている。

ヘルスプロモーション部門

担当：川畑徹朗

tetsurok@people.kobe-u.ac.jp



故郷の桜島をバックに

今日の健康課題と密接な関係がある行動に焦点を当て、人々とりわけ青少年が健康を損なう恐れの高い危険行動を避け、健康を増進する行動を主体的に選択できるようにするための方策（環境づくりと健康教育）に関する研究を行っている。

2006年度は、青少年の喫煙、飲酒、薬物乱用を防止することを目指して、健全な自尊心、意志決定スキル、目

標設定スキル、ストレス対処スキル、対人関係スキルなどのライフスキル（心理社会的能力）の形成を主な内容とするプログラムを新潟県岩船郡の某中学校の3年生を対象として実施し、その有効性に関する評価研究を行った。また、前年度に開発した中学校2年生用のプログラムを出版した。また、青少年の早期の性行動を防止するプログラム開発のための基礎的資料を得るために、埼玉県川口市の某中学校の全生徒を対象とした縦断研究を2005年度に引き続いて実施し、中学生の性交経験に関わる要因を分析している。

以上のヘルスプロモーションに直接関わる研究だけではなく、兵庫県三田市教育委員会と連携して、道徳教育において健全な自尊心を育て、学ぶ意欲を高めるための共同研究にも着手し、2006年度は三田市内の全ての小学校5年生と中学校1年生を対象とした実態調査を実施した。

2007年度は、中学生を対象としたライフスキル教育プログラムの開発に引き続いて、小学校高学年を対象としたライフスキル教育プログラムの開発と有効性に関する評価研究に着手した。また、中学校1年生を対象としたライフスキル形成を基礎とする性教育プログラムの開発作業をスタートする。

三田市教育委員会との共同研究は2007年度も継続し、8月には保護者や教員を対象としたシンポジウムを開催し、青少年の健全な自尊心を育てるための取り組みについて意見を交流する。また2007年度からは、新潟市教育委員会と連携し、いじめ防止のプログラム開発に着手した。本プログラムの土台となるのは、主任研究者が中心となって開発したライフスキル教育プログラムであり、健全な自尊心、意志決定スキル、ストレス対処スキル、対人関係スキルの形成が中心的内容となる。なお、8月には新潟市の中学校教員を対象とした、いじめ防止に関するワークショップを開催した。

各部門の概要

ボランティア社会・学習支援部門

担当：松岡広路

mkoji@kobe-u.ac.jp



鉛筆画

人間はどのように生きていけばよいのか、社会はどうあるべきかという二つの哲学的問いは、言うまでもなく実体としては不分離である。一人ひとりの生活様式・価値観と人間社会とは相互に影響しあう弁証法的関係に他ならない。ボランティアとはどのような生き方か。ボランティア社会とはどのような社会なのか。本部門は、ボランティアをキーワードに人間と社会の新しい関係を問うことを大きな主題とする。

そして、特に強調しておきたいのは、そうした「人間と社会の関係性を問う」こと自体が、どのような組織や環境でどのような方法で実践されるべきなのかに注目している点である。いわば、教育・学習論の観点でボランティアとしての人間形成、または、ボランティア社会の創造というプロセスを捉えるところに特徴がある。

2005年度は日本福祉教育・ボランティア学習学会研究大会を企画・運営することによって、関西圏または全国の多くの研究者・実践者とのつながりを作ることができた。2006年度は、そのつながりを活かして、コラボレーション（協働）によるユースのリーダーシップ育成プログラム開発事業や、福祉教育の実践者が自ら自分達の実践を評価することを可能にする「福祉教育キャラバン隊」事業などを手がけてきた。その成果は、日本福祉教育・ボランティア学習学会研究大会において共同研究として発表した。実は、アクションリサーチの難しさを実感させられたと

いってもよい。多くの研究者や実践者または住民達とともに、実践および研究活動を展開することは、葛藤と調整という困難な課題をいかに克服するかにかかっている。コーディネーション機能を高めてゆくことが大きな課題であることを痛感した。

しかし、2006年度は新しい方向性との出会いもあった。ESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な開発・発達のための教育) である。ESDとは、福祉教育・人権教育・環境教育・国際理解教育などの総合化によって機能するとされる統合的かつ未来志向型の教育である。HCセンターの他の部門と協働せずにはその実施・検証はかなわないが、ボランティア活動は、ESDに求められる多様な領域における課題との接近や誠実に実践している人々との出会いを生む機会にもなる。阪神間の多くのNPOの協力を得て、「ESDボランティア塾—ぼらぼん」事業を実験的に企画実施しつつある。

労働・成人教育支援部門

担当：末本誠

suemoto@kobe-u.ac.jp



沖縄県大宜味村塩屋ウングミ祭にて

成人教育の領域は労働や職業に関する領域、福祉や健康、社会教育、農業、大学など、さまざまな形で展開している。近年、成人の学習論研究において著しい進展が見られ、成人が学ぶということについての実践・原理的な研究が可能になった。ライフストーリーの成人教育への応用は、そうした動きの一つである。本部門では、様々な職種にまたがった「現場」で担当者（伴奏者）として活躍している実践者の参加を得て、ライフストーリーを共通の方法論とする異業種の人々による、実践的な研究組織を

作ってきた。それぞれの「現場」に応じた実践が試みられ、その途中経過や成果が研究会で報告・論議されて、また「現場」に戻された。またここでの活動は学部・大学院での教育活動と連動しており、それぞれの成果が交流・共有された。さらにここでの活動は、フランス語圏のライフストーリーの成人教育への応用を目的とした国際的な研究活動(ASIHVIF)とも連動し、末本によって例年の研究大会で報告・紹介されている。今年度の具体的な活動は、次の通りである。

- ①末本のライフストーリーの成人教育への応用に関する研究成果の検討をした。沖縄の字誌づくりやライフ・イベント研究についての紹介を基に、その各「現場」での意義や可能性について論議した。
- ②龍野農業改良普及センターの事業で、団塊の世代を対象とした新規就農者のための「知る場カレッジ」での、ライフストーリーの応用を試みた。退職や転職という人生の転機を、自己の経験の振り返りとその意味の再発見を通して乗り越え、農業外で獲得した知識や問題意識を農業の世界に持ち込む可能性が探求された。
- ③神戸生活創造センターの企画として展開されたシニア・セカンドライフ講座「自分語録づくり」での取組で、自己の人生経験を語るワークショップの場が作られた。
- ④書の社会的意義の解明に関する実践的な探究として、障害のある成人に対する書のワークショップを開催した。
- ⑤放送大学での成人教育実践教育機関としての意義についての論議をした。
- ⑥部門独自の活動として「団塊世代の自分づくり」ワークショップを開催した。
- ⑦一昨年度の学部の演習として実施されたハンセン病回復者とのライフストーリー実践の分析と解釈の試みを行った。当日のビデオ映像を基に、ナラティブな手法の持つ教育的な意味や方法論についての研究・討議を実施した。

案内地図



【最寄駅】

JR「六甲道」駅
 阪急電鉄「六甲」駅
 阪神電鉄「御影」駅
 *いずれの駅からもバス
 36系統「鶴甲団地」行きで、
 「神戸大学発達科学部前」下車

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター
 神戸大学大学院人間発達環境学研究科
 〒657-8501 兵庫県神戸市灘区鶴甲3-11
 TEL:078-803-7970 FAX:078-803-7971



HC CENTER Graduate School of Cultural Studies and Human Science, Kobe University
 3-11 Tsurukabuto, Nadaku, Kobe 657-8501 TEL:81-78-803-7970 FAX81-78-803-7971
 URL <http://www.research.kobe-u.ac.jp/hudev-hc/>